

全国草原再生 ネットワーク

草原がつなぐ、人・自然・文化

ニュースレターvol.8 (Oct., 2011)

<発行>全国草原再生ネットワーク
<http://www.sogen-net.jp/>

今回の報告地
書籍紹介を含む



■次回の全国草原サミット・シンポジウムについて

◇「第9回全国草原サミット・シンポジウム in みなかみ」の開催が決まりました！

来たる平成24年10月27日～29日、関東においては初開催となる『第9回全国草原サミット・シンポジウム in みなかみ』を開催致します。

群馬県の北部に位置する「みなかみ町」は、日本百名山「谷川岳・武尊山・至仏山・巻機山・平ヶ岳」に抱かれ、また、日本を代表する河川「利根川」の源流の町として知られる、豊かな自然と温泉に恵まれた風光明媚な町です。

今回の舞台は、みなかみ町の中でも、とりわけ豪雪地帯として知られる藤原地区に位置する町有地・上ノ原「入会の森」です。かつて地域住民が協同管理・利用してきた茅場を、現在は利根川流域の市民団体「森林塾青水」と地元住民、行政が三位一体となって保全・活用に取り組んでいます。春には野焼

き、秋には茅刈りが行われ、そこで刈られた茅は、国指定文化財の茅葺き屋根材や大震災被災地の仮設住宅用屋根断熱材としても用いられています。

日本の原風景とも呼べる上ノ原「入会の森」は、ススキ草原11ヘクタールとミズナラ林10ヘクタールからなり、「みなかみ町昆虫保護条例」の対象地としても選定されています。中央に十郎太沢が走り、多種多様な動植物が生息しており、自然とふれあう学習の場としても大いに活用されています。

『第9回全国草原サミット・シンポジウム in みなかみ』へ、多くの皆様の御参加をお待ち申し上げます。

(実行委員会)



■各地からの報告

◇阿蘇地域の牧野カルテ作成のための植生調査に参加しました

2011年9月5、7、8日に、熊本県阿蘇で牧野カルテ作成のための植生調査に参加しました。阿蘇地域では牧野組合という組織がいくつもあり、それぞれが野焼きや放牧、草刈りを行っています。こういった地元牧野組合の維持管理活動を支援するため、環境省が主体となって現在牧野カルテの作成を進めているところです。牧野カルテでは牧野の土地利用履歴や、動植物の生息・生育状況、牧野内の地理・地名などの調査を行っていますが、今回は2011年度の植生調査について報告します。

今年度は3つの牧野で調査が行われています。A牧野は全域にわたって季節ごとに牛を移動させながら放牧し、高さの異なる多様な植生が広がっています。B牧野は阿蘇の外輪山壁で放牧が行われ、外輪山上には改良草地（人工草地）が広がっています。C牧野は比較的平坦な地形が多いため、放牧だけでなく大型機械による草刈りも行われています。このように、地形や管理方法などの違いによって特徴ある植生が維持されていますが、特に興味深かった2つのタイプの植生について紹介します。

一つ目はB牧野の改良草地を放棄した場所です。過去に一度、外来牧草が播種されて改良草地になった後、草地更新が行われず野焼きと放牧だけが行われてきました。見た目はシバやネザサが広がる野草



地なのですが、調査してみると出現する植物の種数は他の野草地よりも少ないことが分かりました(図)。このことから一度草地改良を受けたあとに進入・定着しやすい野草種としくい野草種がいると考えられます。改良草地は阿蘇の草原の生物多様性を脅かす要因の一つですが、今回のような植生タイプのデータは改良草地を野草地へと再生するためのヒントになるかもしれません。

二つ目はC牧野の毎年9月に大型機械で草刈りをしている所の植生です。ここでは、ススキ等の大型の優占種は存在せず、ユウスゲ、タムラソウ、サイヨウシャジン、ヒメノダケなどお盆の時期に開花する

植物が多数出現する、まさに「花野」の状態でした。1m×1mの調査枠に出現する植物の種数が平均で30種にもものぼり、他の場所(植生)に比べて圧倒的に種多様性の高い場所です(図)。秋に草刈りをするとは様々な花が咲くということは以前から知られていましたが、大型機械を使った草刈りでも同じように多様な植生が維持されるということは非常に興味深い点です。近代的な収穫機械による採草と種多様性の高い植生が共存できるとい

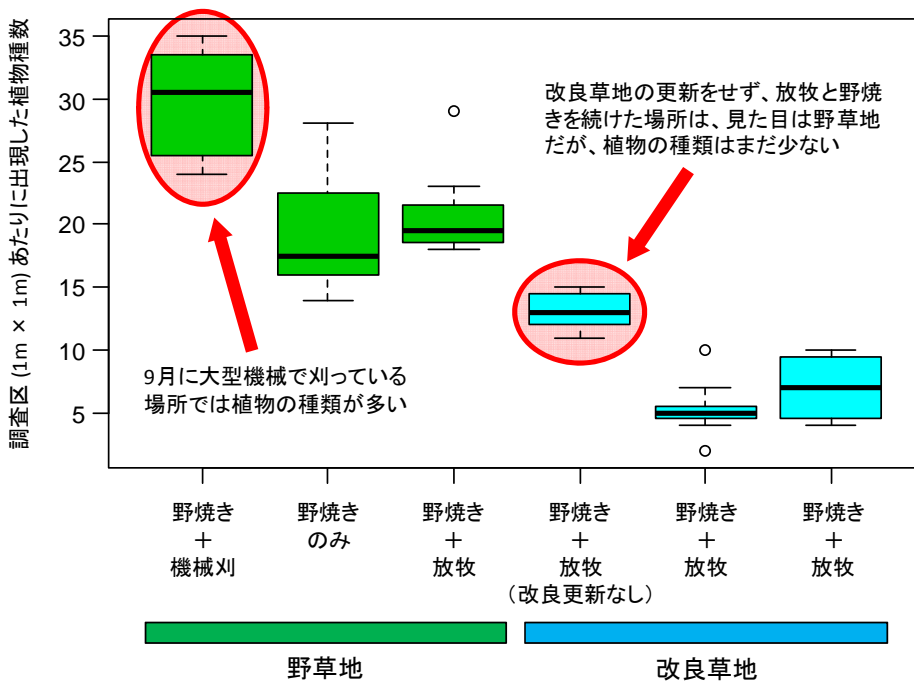


図 牧野カルテ植生調査から明らかになった管理タイプ別の植物の種数



う結果は、省力的に生物多様性の高い草原を管理できるという点においても重要です。

以上、牧野カルテの植生調査の結果の一部を紹介しました。阿蘇の草原は非常に広大で、管理方法や地形、地域性など植生や植物の分布を決める要因が複雑に絡み合っています。今後、牧野カルテ調査の

データが蓄積されることで、このような要因のうち草原の保全と再生にとって重要なものが抽出できるのではないかと楽しみにしています。

(横川昌史：京都大学大学院生)

◇三瓶山で草泊りを作りました

三瓶山に残る草原景観は、観光的にも生物多様性保全上も重要な存在です。その存在と価値を身近に感じてもらうため、そして、草利用の可能性について理解を深めるために、草原保全と利用の最先進地である熊本県阿蘇地域で伝統的に作られている「草泊り」と「草小積み」を西の原に作りました。三瓶でははじめての試みです。(しまね自然と環境財団平成23年度ふれあい環境助成事業)

講師 阿蘇市一の宮町 山部今朝範さん
ワークショップ開催日 2011年10月22日(土)
のべ参加者数(準備作業含む)約50人

三瓶山西の原は最近2年間、悪天候や震災の影響で野焼きが実施されず、枯草が蓄積し、草丈も高くなってきました。大田市が主催する野焼きへの機運が衰えてはならないので、もういちど市民の目を草



国際ワークキャンプメンバーによる草集め 9月24日





原に向けたいと、阿蘇に習った草利用のデモンストレーションを行うことにしました。

1 か月前から、国際ワークキャンプや、大田市緊急雇用創出作業班の力も借りて、クロスカントリーコースのあちこちで、丈の高いススキを探しては刈取り結束をして草を集めておきました。あとから数えたら軽トラック 20 台分ありました！

今回主力となった緑と水の連絡会議研修生（田舎で働き隊！）メンバーは、阿蘇グリーンストックさんからお借りしたDVD「阿蘇草原のわざ」を何度も見て、草泊りの制作手順を学び、講師の山部さん到着までに、竹による骨組みを作っておきました。

当日は天候が心配されましたが、地元ケーブルテレビ局が撮影する中、雨が降り出すまでに草泊りの最終段階の「とべ」を載せるところまでできました。

さらに、山部さんの奥さんから縄手の作り方を教わって、当日刈り取ったばかりの草を使って、草泊りの横には草小積みも完成させることができました。

三瓶山周回道路からよく見える場所にふたつが並び、初めて見る人に「なんだろう？」と思わせるインパクトは十分です。「ご自由に中に入って見学してください」という掲示もしてあります。これから、私たちのメンバーで実際に泊まってみようと計画しています。

なお、余った草は、簡易版の草小積みにして、地元の農家さんに活用してもらいます。

（和田譲二：NPO 法人緑と水の連絡会議
（島根県大田市））

◇阿蘇草原再生募金による第1弾活動が決定しました

阿蘇草原再生募金は、昨年 11 月の募金活動開始以降、今年 3 月末までに、企業、団体や一般の方々など 651 件から、1900 万円近い寄付金が集まりました。そこから必要経費が差し引かれた額について、助成内容等が検討されました。

助成の基本原則は、次の 3 つです。

- ①実質的に阿蘇の草原再生につながる
- ②地元が元気になる
- ③募金者にわかりやすい

（草原再生への貢献が目に見える）

「草原維持管理の継続」に繋がる活動を中心に、募集が行われ、多くの申請がありました。第13回の阿蘇草原再生協議会において、第1弾の支援が決定

されました。支援が決定した項目は、下記の表の通りです。

申請項目	応募者・団体	備考
繁殖あか牛の導入	個人 145 人	1 申請者に対して 1 頭分まで助成。実績報告に沿って年度末以降に交付。
野焼き放棄地の草原再生	原野管理組合	計画案の 50%まで助成。
あか牛肉の普及啓発と環境教育	市町村小学校給食・熊本県立大学	人数割で配分した金額相当の肉を助成。
草小積み製作設置	牧野組合	実施報告に基づき、1 基 5 千円を交付。普及啓発用の看板設置にも費用助成。
野焼き支援ボランティア運営	2 団体	実施報告に基づき交付。



(事務局)

■書籍紹介

◇「ちょうちょのりりい」

オオルリシジミは、かつては日本各地で観察されてきました。1970年代から、開発や農薬などの影響で、食草のクララ（マメ科の植物）とともに、オオルリシジミの数は全国的に激減。現在では、長野県の一部と、熊本県の阿蘇山麓のみでしか生息が確認されていなく、幻のチョウとなっています。このチョウの一生が、かわいい物語絵本になりました。

作：江田慧子 絵：さくらい史門

発行：オフィスエム

¥1,260(税込)

ISBN：978-4-904570-39-5 C8745



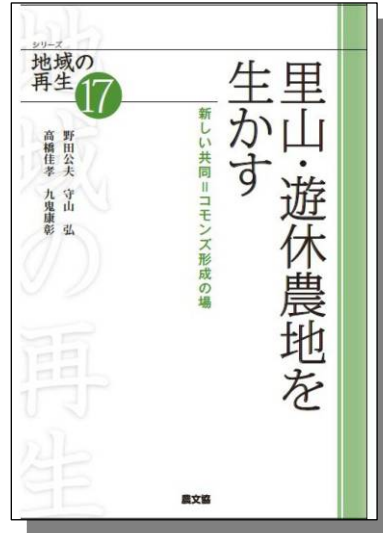
(事務局)

◇「里山・遊休農地を活かす 新しい共同＝コモンズ形成の場」

里山、草原と人間のかかわりを、東日本における刈敷や秣場、谷津田のモザイク的な利用と、西日本における火山の大草原への火入れと採草・放牧を中心に、歴史的に詳細にふりかえります。そして、肥料、飼料の採取や野焼きなど、人間がかかわることで、生物多様性や盆花や秋の七草といった四季折々の民俗・文化が守られてきた歴史に学びつつ、これら農地と山の「境界域」が耕作放棄地となっている現状のなかで、都市住民の力も借りた新たな協働体制(コモンズ)による里山・草原再生の道を、実践を踏まえて提案するものです。

- 序章：里山・草原・遊休農地をどうとらえるか
 第1章：里山の歴史的利用と新しい入会制
 第2章：草原利用の歴史・文化とその再生
 第3章：遊休農地問題とその解消に向けた取り組み

著者：野田公夫・守山 弘・高橋佳孝・九鬼康彰
 発行：農産漁村文化協会
 ¥2,730(税込)



(事務局)

■草原をめぐる動き (2011年11月～1月)

- 11/12-13 茅の運び出し&割り薪づくり、そして「山の口終い」(場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水)
 11/19-20 五箇山茅葺きワークショップ(相倉合掌造り交流館(富山県南砺市相倉)、連絡先：一般社団法人日本茅葺き文化協会 事務局)
 11/23 千町原の草刈り(場所：千町原(広島県山県郡北広島町東八幡原)、連絡先：芸北高原の自然館)
 11/23 乙女高原草刈りボランティア(場所：乙女高原(山梨県山梨市牧丘町)、連絡先：乙女高原フ

- ァンクラブ)
 11/26 農村計画学会 2011 年度秋期シンポジウム～阿蘇草原保全の現状と再生への課題－阿蘇の文化的景観の持続的保管理と地域活性化を求めて－(場所：九州大学箱崎キャンパス内 国際ホール、連絡先：農村計画学会)
 12/3 又は 10 ドリーネ畑周辺の火道切り(場所：秋吉台(山口県美祢市)、連絡先：ほっとビレッジ美東)
 ※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol.8 2011年10月号

全国草原再生ネットワーク事務局
 694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1
 NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】第9回の全国草原サミット・シンポジウムの開催が決まりました。来年の10月27日～29日、群馬県のみなかみ町で開催されます。開催地には上ノ原と呼ばれる草原があり、ネットワークの会員でもある森林塾青水が熱心に活動されています。昨年秋には、茅刈りコンテストにも参加し、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。サミットシンポジウムの開催が、いまから待ち遠しいです。